

与謝野鉄幹と漢詩

——『冬柏』時代の漢詩人 與謝野 寛——

与謝野鉄幹が漢詩を制作した時期は、少年時代というにふさわしい十歳代の五年間と、三十数年を経て第一次『明星』終刊後に第二次『明星』を創刊した五十歳代以後から六十二歳で亡くなるまでの時期、とに大きく二分される。

仮に前者を「第一期」、後者を「第二期」と名付けるならば、その作品は、「第一期」は『海内詩媒』、「第二期」は第二次『明星』等によって見ることができる。ただし「第二期」は、「第一期」と異なり、第二次『明星』だけではなく『満蒙遊記(草)』、『冬柏』また個人蔵の鉄幹自筆の色紙・紙箋・書簡・草稿等、残された作品はかなりの数にのぼり、今もなお想定外の所から発見されることがある。

今回取りあげる『冬柏』時代の鉄幹の漢詩であるが、時期的には昭和五年から鉄幹死去の昭和十年までであり、『冬柏』以外に『書簡集成』及び『渡邊湖畔氏蔵』の二種の資料によることにした。

なお「渡邊湖畔氏蔵」の鉄幹の漢詩は『書簡集成』に一部見えるものもあるが、鉄幹自筆の原稿・色紙・書簡であり、その存在は知られていず、現所蔵者の渡邊和一郎氏の特別のご好意により、閲覧させていただいたものである。ただし日時が未確定のものも含まれている。

○『冬柏』について

本稿で主な資料とする『冬柏』は、今まで筆者が論じてきた『海内与謝野鉄幹と漢詩

西村 富美子

詩媒』や『明星』第二次と異なる所があるので、『冬柏』についての概略及び前二者との相違について、先に現段階で分かっている範囲内で簡単に述べておくことにしたい。

『明星』第二次終刊(昭和二年¹⁹²⁷九月)から三年後の昭和五年(1930)三月二十三日付けで、創刊号の第一巻・第一号を発行し、昭和二十七年(1952)年三月二十八日、終刊号の第二十三巻・春季号が発行されている。発行年数は約二十二年間にわたる。『明星』(第一次)は約八年、『明星』(第二次)は約六年であったのに比して、『冬柏』の二十二年という年数は驚くべき長期間である。

ただし恐らく記録的と言える長期にわたる発行年数なのだが、残念なことには知名度の点では、『冬柏』は『明星』(第一次)、『明星』(第二次)にはるかに及ばず、一部の専門家を除いて一般的に知られていないというのが実状である。

この発行年数と知名度とのアンバランスには幾つかの要因が考えられる。それについて少し説明をすることにしたい。

雑誌の体裁が、太平洋戦争の戦中戦後の動乱期を挟んだ特殊な時代の影響もあって、『明星』(第一次・第二次)の芸術・美術雑誌かと思いがうような豪華版ではなくなっている。誌版・頁数・紙質・装幀・挿絵等は『明星』の比では無い。が発行された冊数は『明星』を優に超える。『明星』(第一次)は百号(冊)が終刊、『明星』第二次は四

十八冊が終刊号であるが、『冬柏』は第一巻から第二十三巻に至るまで、約二百号(冊)に近いと思われる。だが実際の発行冊数については現在はまだ未確認の状態である。

後に述べるように、『冬柏』には二十首の漢詩(うち十九首が鉄幹作)が見えるが、その掲載様式は『明星』第二次よりも特殊であり、「雑俎」という項目も立てずに各「頁」の余白を利用して、「埋め草」として遠慮がちとも思える形で載せているのである。最大限の無駄なき紙の利用という実利的な面にうまく自作の漢詩掲載のスペースを適用したのだが、『明星』第二次よりも数歩後退したかと思えるこの方法には、鉄幹のどのような意識が働いていたのだろうか。これにはさらに興味ある事柄が存在することも後の説明のなかでふれたいと思う。

次に『冬柏』の主宰者だが、新詩社の同人誌『明星』は、「第一次」は晶子の参加は遅れるものの、いちおう『明星』は両誌ともに鉄幹晶子両人が主宰者であるが、『冬柏』は主宰者・編集者が転々と転移し、特に第十八巻以後は複雑を極めている。

発行五年後の昭和十年(1935)に鉄幹が没し、さらに七年後の昭和十七(1942)年には晶子も没したため編集者は交代を続け、従前の同人または新規加入の同人の手によって、鉄幹・晶子という主宰者亡き後も十年間発行し続け、昭和五年から昭和二十七年終結の時まで細々と紆余曲折を経ての二十二年であった。

同人に関しては、石井柏亭、平野万里、尾崎弔堂、有島生馬、佐藤春夫、高濱虚子、高村光太郎、高安やす子、堀口大学、吉田精一、正宗敦夫、渡邊湖畔、深尾須磨子、木下木太郎、森於兔、森潤三郎、佐々木信綱、竹友藻風、北原白秋、山田孝雄、奥野信太郎、池田亀鑑、塩田良平、久松潜一、信楽正純、小金井喜美子(鷗外の妹)、森茉莉、森杏奴、丹羽あき子、石上露子、近江満子等、『明星』第一次・第二次以来の同人、また新規加入の同人もいるが、やはり錚錚たる面々が名を連ねている。

雑誌自体は先に述べたように深刻な時代背景もあって、見た目は質素だが、鉄幹・晶子という新詩社『明星』の偉大な主宰者を失った後も同人達の熱意が感じられる文芸雑誌を発行し続けたこと自体が敬服に値するものがあり、その稀少価値的存在は高く評価されるべきものと筆者は考えている。

○

さて、『冬柏』に鉄幹の漢詩が見えるのは、第五巻と第六巻であり、第五巻に十三首、第六巻に六首の計十九首を掲載する。先ず第五巻掲載の漢詩から順を追って挙げていく。

冬柏山房小集席上作

冬柏山房小集の席上にての作

一(第一号)

冬柏萬山花自紅◎ 冬柏 萬山 花自ずから紅なり
一溪深處訪詩翁◎ 一溪 深き処に詩翁を訪う
徑廻崖腹行望海 ◎ 徑は崖腹を廻り 行ゆく海を望む
亭占林梢坐聽風 ◎ 亭は林梢を占め 坐して風を聴く
春月照軒姑代燭 ◎ 春月 軒を照らして 姑く燭に代わり
主人煎茗不須僮 ◎ 主人 茗を煎るに 僮を須いず
句成唱和怡然笑 ◎ 句成りて唱和し 怡然として笑う
聲在歸雲搖曳中◎ 声は帰雲揺曳の中に在り

◎上平一・東

「冬柏山房」は神奈川県鎌倉市の千葉が谷にある内山英保の山荘で越山荘と呼ばれた。内山氏は鉄幹・晶子の二十年以上にわたる歌の弟子であり、この山房に鉄幹・晶子夫妻や同人を招きしばしば歌会を開いている。この詩は昭和六年(1931)十二月七日に開かれた歌会での作であろう。七言律詩。

次高岡市圖書館長小川茅村先生所贈芳韻卻呈

二(第三号)

高岡市図書館長・小川茅村先生贈る所の芳韻に次し、
却呈す

幽谷芝蘭自放芬◎ 幽谷の芝蘭 自ずから芬を放ち
高陵達士獨看君◎ 高陵の達士 独り君を看る
老來不問江湖事 老來 問わず 江湖の事
唯向古書堆裏聞◎ 唯だ古書堆裏に向いて聞く

◎上平十二・文

北陸方面への旅行中に、富山県高岡市の図書館で鉄幹・晶子夫妻が講演した時、館長の小川茅村氏からの贈詩に次韻した答詩。昭和八年（1933）十一月五日の作。七言絶句。

時事有感三用湖畔君來示詩韻

三（第四号）

時事感すること有り、三たび湖畔君來りて示す詩の韻を用う
誰能守清白 誰か能く清白を守る
滿目是汚泥◎ 滿目 是れ汚泥
名教人間盡 名教 人間尽き
謠言天下迷◎ 謠言 天下迷う
黨爭徒擾擾 黨争 徒に擾擾
戰氣尚淒淒◎ 戰氣 尚お淒淒
投筆發長歎 筆を投じて 長嘆を發し
空驚兒與妻◎ 空しく兒と妻を驚かす

◎上平八・齊

佐渡の渡邊湖畔からの贈詩に対する答詩。次韻か和韻の詩。「渡邊湖畔氏藏」⑤の鉄幹自筆の紙箋（未定稿）には、詩題は「偶成三疊韵」、詩の第六句は「戰氣尚餘淒」とある。制作時は昭和九年ごろか。なお「渡邊湖畔氏藏」の③にも同様の詩かと思われる紙箋があるのだが、⑤・③ともに、「未定稿 寛」と記しているので、この『冬柏』の詩が定稿となったものと推定される。五言律詩。

与謝野鉄幹と漢詩

雪後口占、四用湖畔君來示詩韻

四（第五号）

雪後口占、四たび湖畔君來たりて示す詩の韻を用う
門前難一步 門前 一步なり難し
雪後滿深泥◎ 雪後 深泥滿つ
貧富世情隔 貧富 世情隔たり
是非天意迷◎ 是非 天意迷う
百年無逸樂 百年 逸樂無く
三月有餘淒◎ 三月 餘淒有り
迂拙平生計 迂拙 平生の計
老來愧我妻◎ 老來 我が妻に愧ず

◎上平八・齊

三と同じく、湖畔からの贈詩に対する答詩で、「次韻」か「和韻」の詩。「渡邊湖畔氏藏」④の鉄幹自筆の紙箋には、詩題は「偶成四疊韵」（未定稿）、詩の第六句以降は「二月有餘淒、笑嗅梅花氣、茅軒我与妻」とある。また『書簡集成』第四卷43に、題は無く、第六句を「二月有餘淒」とする寛のペン書きの草稿を収める。西村一平氏宛の書簡の別紙であり、日時は昭和十一年（1936）五月二十六日、差出人は晶子とある。鉄幹没後に何らかの事情で紛れこんだものだろう。制作時は昭和九年（1934）二月ごろか。

三、四の二首は、ともに五言律詩であり、押韻の漢字も全く同じ「和韻」の詩なので、掲載号数は異なるが、同時期の作とも考えられる。五言律詩。

次の、五・六・七・八の四首の詩は、第五巻・第八号に載せる詩だが、五・六は同頁の紙葉の端に、七は連作の短歌から次の連作の短歌への紙葉の余白に、八も連作の短歌から次の連作の短歌に移る紙葉の端にと、三カ所に分けて載せている。七は、森鷗外の十三回忌の当日

与謝野鉄幹と漢詩

の作であるが、五・六・八の三首は湖畔に宛てた贈詩である。

與湖畔君別遙有此寄

五（第八号）

湖畔君と別れ遙かに此れを寄する有り

梅天鬱不開 梅天鬱として 開けず

頻聽雨聲急 頻りに聴く 雨声の急なるを

書室重帷中 書室 重帷の中

只恐陳編濕 只だ恐る 陳編の湿るを

日午尚懸燈 日午 尚お燈を懸け

驟寒衣又襲 驟寒 衣又た襲ぬ

案頭何所披 案頭 何の披く所ぞ

一卷淵明集 一卷の淵明集

欲與拆疑義 与に疑義を析かんと欲し

故人望不及 故人 望むも及ばず

今夕到家不 今夕 家に到るやあらざるや

佇立暗垂泣 佇立して暗かに泣を垂る

◎入声十四・緝

渡邊湖畔への贈詩である。『書簡集成』第三卷325、には、詩題は「寄懷于湖畔君」（未定艸）とあり、詩の第三句・四句は「草堂半下帷、窃恐書架濕」、第六句は「奇寒」、第七句は「讀支頤」、第八句は「靖節」、第九句は「此樂与誰俱」、第十句は「去難」、第十一句は「千里懷佐州」、末句は「望北」とあり、かなりの異同がみられる。昭和九年（1936）六月三日付けの湖畔宛の書簡であり、『冬柏』の七月二十八日発行の時までかなり推敲を重ねた定稿のようである。

なお鉄幹は、この湖畔宛の書簡に「貴下の歌は勿論、漢詩もお見せ被下度候」と末筆に記していて、当時両者の間に漢詩の交換があったことを思わせる。五言古詩、十二句、一韻到底。

疊韻酬湖畔君

六（第八号）

疊韻 湖畔君に酬ゆ

故人和我詩 故人 我が詩に和す

應酬一何急 應酬 一に何ぞ急なる

雲箋千里來 雲箋 千里來たり

猶見墨痕濕 猶お 墨痕の湿うを見る

五古十二行 五古 十二行

清新脫踏襲 清新にして 踏襲を脱す

可知八叉才 可知 八叉の才

佳句筆下集 佳句 筆下に集う

以我比高人 我を以て 高人に比するも

老癡非所及 老痴の及ぶ所に非ず

只感交誼深 只だ交誼の深きを感じ

燈下泫然泣 燈下に泫然として泣く

◎入声十四・緝

渡邊湖畔からの贈詩に対する「和韻」の答詩であるが、前の五の詩と押韻の漢字がすべて同じである。三、四と同じように、五、六の詩も同時期に作られた可能性がある。入声韻の詩であることも珍しい。当時の鉄幹の心理状態を反映しているのではないだろうか。両詩の末句の「佇立して暗かに泣を垂る」「燈下に泫然として泣く」とある表現からも感傷的な思いが伝わる。

「渡邊湖畔氏蔵」の⑩には、詩題は「謝湖畔君」、詩の第二句は「詩成」、第三句は「今朝」、第五句は「冲澹」、第七句は「思無邪」、第八句は「莫言従手」、第十句は「溢美不敢」、第十一句は「唯…友情…」とある。五言古詩、十二句、一韻到底。

鷗外先生十三回忌辰書懷

鷗外先生十三回忌の辰に懷いを書す

七（第八号）

醫學兼詞藝

医学詞芸を兼ね

乾坤隻手開◎

乾坤 隻手開く

官高心似水

官高きも 心は水に似たり

人瘦格如梅◎

人瘦せて 格は梅の如し

文献千年績

文献 千年の績

明治第一才◎

明治 第一の才

此公難再見

此の公 再び見難し

弟子老蒿萊◎

弟子 老蒿萊

◎上平十・灰

鉄幹の師でもあり、知己でもあった森鷗外の十三回忌の時の作。

「渡邊湖畔氏蔵」の⑫には、詩題は「鷗外先生十三回忌辰謹賦」、詩の第一句「文學」、第三句は「情」、第四句は「心秀語」、第五句は「鬱々一生業」、第六句は「昭々千古」、第七句は「復難」とある。制作時は昭和九年（1934）。五言律詩。

酬湖畔君次其寄懷韵

湖畔君に酬い其の懷いを寄すの韻に次す

八（第八号）

千里雲箋纔可憑◎ 千里の雲箋 纔かに憑る可し

唱和何日復連肱◎ 唱和 何れの日か復た肱を連ねん

誰全膠漆新時代 誰か膠漆の新時代を全うせん

獨許老癡舊友朋◎ 獨り老癡 旧友朋を許す

幽竹陰深鶯少到 幽竹 陰深くして 鶯少に到り

古桐花落蟻猶升◎ 古桐 花落ちて 蟻 猶お升る

南軒向晚讀書坐 南軒 晩に向かい 書を読みて坐す

一點青熒案上燈◎ 一点の青熒 案上の燈

◎下平十・蒸

渡邊湖畔からの贈詩に対する次韻の答詩。「渡邊湖畔氏蔵」の⑧には、詩題は「次湖畔兄寄懷瑤韵以酬」（未定稿）、詩の第三句は「…誰

与謝野鉄幹と漢詩

成好」、第五句は「…草露乾鳥稀」、第七句は「微涼動」とあり、制作時は昭和九年（1934）晩春のころか。七言律詩。

次の、九・一〇・一一の三首の詩は、第五卷・第一〇号に載せるが、第八号と同じく九・一〇は同頁の紙葉の端に、一一は詩から次の連作の短歌への余白にと、二カ所に分けて載せている。

愛煙

愛煙

九（第一〇号）

靈奇淡巴草

靈奇なる淡巴草

知在仙境裁◎

仙境に栽うるを知る

煙葉清芬氣

煙葉 清芬の氣

一喫心悠哉◎

一喫 心悠なる哉

二喫又三喫

二喫 又た三喫

自然成詩媒◎

自然 詩の媒を成す

虛室氤氳白

虛室 氤氳白く

喫喫餐霞來◎

喫喫 餐霞來たり

竊謂皇天意

竊かに皇天の意を謂い

助我吐鳳才◎

我が鳳才を吐くを助く

興酣下筆處

興 酣にして 筆を下す処

瑞雲濛不開◎

瑞雲 濛として 開かず

◎上平十・灰

この詩は、『冬柏』以外には見えないもので、鉄幹の日常生活を詠んだ詩として興趣に富んでおり、「閑適」の詩とも言える。夫妻ともかなりの煙草好きであったようだが、文学に対する煙草のプラスの効用を説いており一読に値する。煙草を「一喫…二喫…三喫」と悠然と燻らしながら詩想にふけり、「自然 詩の媒を成す」と詩作の媒介だとの表現は佳句と言えよう。煙草から神仙の世界への連想は鉄幹独自の発想ではなからうか。五言古詩、十二句。

与謝野鉄幹と漢詩

北信上林客舎、解近吉田學軒先生、廣和先生贈詩瑤韻、卻呈

北信上林の客舎、吉田學軒先生に解近し、先生贈詩の瑤韻に廣和し、卻呈す
一〇（第一〇号）

幽溪轄野客樓中◎ 幽溪 轄野 客樓の中

邂逅相逢歡共同◎ 邂逅 相逢う 歡び共に同じ

語及象山采芝迹 語は象山の采芝の跡に及び

遺芳猶訝託流風◎ 遺芳 猶お流風に託すかと訝る

（註、佐久間象山、曾て山中を巡覽轄野し、瑞芝を得。事は象山伝に詳かなり）
◎上平十・東

この詩も、九と同じく『冬柏』以外には見えない。北信越の長野県の上林温泉の旅館で、鉄幹の漢詩の師、吉田學軒と出会い、學軒からの贈詩に和する詩を作り呈上した。師に出会った喜びと信州松代の藩士また學者であった佐久間象山に師をたとえた。七言絶句。

遙青書屋雜詩、用渡邊湖畔君寄懷韻 一一（第一〇号）

遙青書屋雜詩、渡邊湖畔君の懷いを寄すの韻を用う

不把一竿向釣磯◎ 一竿を把らず 釣磯に向かう

且攤萬卷守書幃◎ 且く萬卷を攤きて書幃を守る

手栽三尺庭中樹 手ら栽う 三尺庭中の樹

驚見十年皆作園◎ 驚きて見る 十年 皆な園を作すを

◎上平五・微

渡邊湖畔からの贈詩に対する次韻の答詩。この詩は『書簡集成』第三卷370に見える。昭和九年（1934）九月十五日付け、渡邊湖畔宛の書簡である。詩題は「書懷用湖畔君寄懷芳韻」とあり、詩の句の異同は無い。また詩に続けて「右は先日（の）拙作を改作せしに候。之は吉田先生の御一閱を乞ひ得たるものに候」との後書きがあり。詩題に相違はあるが、両者とも定稿である。制作時は昭和九年（1934）九月。七言

絶句。

なおこの詩は『書簡集成』第三卷366にも見えており、詩の後に「これは定めて著にも棒にも掛らぬ駄作と存じ候。御一笑被下度候」と記している。370のあとがきの「先日（の）拙作」というのは、この366の詩を指すのであろう。

一二・一三の詩は、第五卷・第二二号に載せる詩だが、二首の詩は、やはり別頁の紙葉の端の余白を埋める体裁である。

遊佐渡國、宿渡邊湖畔君家、次主人所示詩韻

佐渡の國に遊び、渡邊湖畔君の家に宿し、主人示す所の詩の韻に次す
一二（第二二号）

下船把手笑 船を下り 手を把りて笑う

亦復渡江來◎ 亦た復た 江を渡りて来る

迎我詩先有 我を迎えて 詩先ず有り

感君淚忽催◎ 君に感じて 涙 忽として催す

風流同愛字 風流 同じく字を愛し

逸興豈辭杯◎ 逸興 豈に杯を辞さんや

山水佐州好 山水 佐州好し

乞傾遲暮才◎ 乞う 遲暮の才を傾くることを

◎上平十・灰

渡邊湖畔からの贈詩に対する次韻の答詩。漢詩の同好の友である湖畔との再会の喜びが率直に表現されている。「渡邊湖畔氏藏」の①には、詩題は「昭和九年晩秋、遊佐渡訪湖畔君先有五律一首次其韵以酬」詩の第四句は「早」とある。「遙青書屋」と枠外に記された原稿用紙にペン書き。制作時は、昭和九年十一月一日、三度目の佐渡訪問の時。五言律詩。

赴越後車中 越後に赴く車中

一三(第二号)

眼中天地太匆忙◎ 眼中 天地 太だ匆忙
萬象背人飛後方◎ 万象 人を背に後方に飛ぶ
刀峽奇厓點霜葉 刀峽 奇厓 霜葉点じ
香峰驟雨掛虹光◎ 香峯 驟雨 虹光を掛く
清関北出連山秀 清関 北出して 連山秀で
信水西來平野長◎ 信水 西來して 平野長し
可惜快車窓外景 惜しむ可し 快車 窓外の景
刹那一瞥刹那忘◎ 刹那一瞥 刹那に忘る

◎下平七・陽

この詩は、『冬柏』以外には見えない詩であるが、制作時は一二の詩と同時期か。越後平野を走る車窓の風景を叙したものが、第八句の末句は、表現はいいのだが平仄の乱れがある。一句のなかで同じ詩語「刹那」を重ねて用いるのは明らかに誤りなのを取って用いたのは何か意図する所があったのだろうか。七言律詩。

次の一四〜一九までの六首は、第六巻掲載の詩である。一四は第一号に載せる。

落合直文先生忌辰書懷

一四(第一号)

落合直文先生の忌辰に懷いを書く
少年立志路嶢嶢◎ 少年 志を立て 路 嶢嶢
幸遇良師千里行◎ 幸いに良師に遇いて 千里を行く
不在淺香社中讀 淺香社中に在りて読まざれば
寛也畢竟一頑生◎ 寛や 畢竟 一頑生

◎下平八・庚

鉄幹の歌の師、落合直文の法要での作。『書簡集成』第三巻386は、同様の詩を収めるが、詩題は、「次友人某君韻二首」の二の詩であり、

与謝野鉄幹と漢詩

落合直文の法要とは無関係である。詩の第一句は「匹夫」、第二句は「扶掖得…初可…」、末句は「狂」とある。昭和九年(1934)十一月二十七日付け、湖畔宛の書簡である。なお書簡には詩の直後に、「右御次韻下されたく候」という一文がある。

ただし昭和八年(1933)は落合直文没後三十年にあたるので、『冬柏』『書簡集成』の両詩とも「淺香社」(明治二十六年(1893)に、鮎貝槐園等と創立)等の詩語があることから『冬柏』の詩題の「落合直文」三十回忌の時の作と考えるのが妥当であろう。七言絶句。
次の一五は第二号に載せる。

偶感、用渡邊湖畔君寄懷韻

一五(第二号)

偶感、渡邊湖畔君の懷いを寄すの韻を用う
流光催老早 流光 催老早し
疎髮與誰遊◎ 疎髮 誰と遊ばん
訓詁徒彫骨 訓詁 徒らに骨を彫り
拆疑稀點頭◎ 疑を拆き 稀に點頭す
茫茫天地大 茫茫 天地は大にして
窅窅物心幽◎ 窅窅 物心幽かなり
銷盡何方有 銷え尽くす 何れの方か有る
學人千古愁◎ 學人 千古愁う

◎下平十一・尤

渡邊湖畔の贈詩に対する次韻の答詩だが、『冬柏』以外には見えない。内容からは、晩年の作かと推察される。七言律詩。

次の一六から一九までは、第三号に掲載の漢詩だが、一六・一七の二首は、連作の短歌から次の連作の短歌への紙葉の余白を埋める形であり、一八も別の紙葉だが同じような形、一九もやはりおなじような形で、頁の余白を埋めている。

与謝野鉄幹と漢詩

送古澤北冥老兄再赴任于滿洲、用其留別詩韵 一六(第三号)

古澤北冥老兄が、再び滿洲に赴任するを送り、其の留別の詩の韵を用う

蕩蕩王庭利用寶◎ 蕩蕩たり王庭 利用の寶

舊邦方屬命維新◎ 旧邦 方に属して 命維だ新たなり

再出知君懷抱在 再び出ず 君が懷抱在るを知る

一麾千里靖風塵◎ 一麾千里 風塵靖し

◎上平十一・真

古澤末吉(未詳)の留別の詩に対する次韻の詩。『書簡集成』第三卷415に、詩題は同じだが「古澤君」という名称を使つて別の詩を収めている。昭和十年(1935)二月六日付け、渡邊湖畔宛の書簡。制作時は昭和十年二月ごろ。これも同時期の作と考えてよいだろう。七言絶句。

冬日偶成 冬日偶たま成る

一七(第三号)

今日世情唯銃劍 今 世情 唯だ銃劍のみ

古來天下屬英雄◎ 古來 天下 英雄に属す

詩人別有千秋業 詩人 別に千秋の業有り

吟斷寒山落木風◎ 吟 寒山落木の風に断ゆ

◎上平一・東

『書簡集成』第三卷415の同じところに、詩題は「偶感」、詩の第二句は「由来」、第三句は「年事」、第四句は「坐」とある。制作時は同じ昭和十年(1935)二月ごろ。七言絶句。

二月五日雪後作

一八(第三号)

二月五日、雪の後に作有り

天晴暖生閣 天晴れて 暖 閣に生ず

獨坐氣悠哉◎ 獨り坐す 氣 悠なる哉

籬落猶殘雪 籬落 猶お雪を残し

庭除既早梅◎ 庭除 既に早梅

誰憐耽古學 誰か 古學に耽るを憐れみ

何耐伍群才◎ 何ぞ 伍群の才に耐えん

知己唯春色 知己 唯だ 春色

陳編堆裏來◎ 陳編の堆裏に来る

◎上平十・灰

先の二首と併せて、『書簡集成』第三卷415に収める。詩題は「二月五日雪後偶感」、詩の第一句は「屋生暖」、第二句は「意」、第五句は「訓」、第六句は「自缺趁新」とある。制作時は、昭和十年二月、早春のころの作。五言律詩。

遙青書屋雜詩 遙青書屋雜詩

一九(第三号)

世間爭得失 世間 得失を争う

不若守清貧◎ 清貧を守るに若かず

對此寒梅笑 此れに対して 寒梅笑い

逃彼俗士嘆◎ 彼を逃れて 俗士嘆る

空名何爲者 空名 何爲する者ぞ

達道幾多人◎ 達道 幾多の人

凭几悠然老 几に凭れて 悠然として老い

書中自有春◎ 書中 自ずから春有り

◎上平十一・真

この詩は『冬柏』以外には見えないが、制作時期は一八と同じと考えてよいだろう。五言律詩。『冬柏』所載の鉄幹の漢詩の最後の詩であり、同時に鉄幹の漢詩の最終作、亡くなる一ヶ月ほど前の作である。詩題の「遙青書屋」は荻窪にあった鉄幹晶子夫妻の自宅の書斎。

『書簡集成』には、十六首の鉄幹の漢詩が収められているが、『冬柏』時代つまり昭和五年から、鉄幹が亡くなる昭和十年までの作が十一首、その中ですでに『冬柏』のところで挙げたものが九首あり、『書簡集成』所収のものとして二首を取りあげる。
次の詩は、第三卷366に収める詩である。

書懷廣和湖畔君瑤韻

卷三 366

懷いを書し湖畔君の瑤韻に廣和す

生平自足一狐裘◎ 生平 自ずから足る 一狐裘
天下所求吾不求◎ 天下の求むる所 吾は求めず
詩無有花也有月 詩に花有ること無きも 也た月有り
優游未敢憶歸休◎ 優游 未だ敢えて帰休を憶わず

◎下平十一・尤

渡邊湖畔の贈詩に対する次韻の答詩。昭和九年九月五日付け、の湖畔に対する書簡に見える二首の一首である。

漢詩に先立って「……近作の漢詩二首お示し被下うれしく存じ候。何れも瓊字にて次韻甚だむつかしく候。」とあり、この詩と既に注の(一)で挙げた「又」と題する詩の二首を記している。この二首には、何か超世俗また逃避の思想が表現されているように見え、「閑適」の詩に通ずるものがある。七言絶句。

次の詩は卷三・375・396の二箇に収める。絵葉書と書簡。

偶成、次上田喜太郎君近作韵

卷三・375・396

偶たま成る、上田喜太郎君の近作の韻に次す
自憐疎髮老殘人◎ 自ら憐れむ 疎髮老殘の人
猶對秋風燈只親◎ 猶お秋風に對いて 燈只だ親しむ
詞葉不如霜葉美 詞葉 霜葉の美なるに如かず
前林高樹悉金身◎ 前林の高樹 悉く金身

与謝野鉄幹と漢詩

◎上平十一・真
第三卷375の昭和九年九月二十七日付け、湖畔宛の絵葉書。及び396の昭和九年十一月二十七日付け、湖畔宛の書簡で差出人は鉄幹昂子夫妻。詩題は「次友人某君韻二首」の一首目、二首目は、すでに『冬柏』一四の所でふれた詩である。『冬柏』では落合直文の三十回忌の法要の詩として掲載する。七言絶句。

○

最後に「渡邊湖畔蔵」の鉄幹の漢詩を取りあげるが、資料は紙箋・色紙・書簡などであり、『冬柏』『書簡集成』とは資料の質が全く異なることを初めに断っておきたい。

これらの原資料の解説は、筆者によるものである。一部判読できないものについては、専門家の教えを乞うた。なお論文中の鉄幹の漢詩の訓読はすべて筆者の責によるものである。

「渡邊湖畔氏蔵」資料の漢詩は十四首あるが、『書簡集成』と同じく『冬柏』のところで、すでにふれたものまた注に挙げたもの、また『滿蒙遊草』に見えるものは省略し、この資料だけに見えるもの、四首の漢詩に限定した。

疊韻偶感

寛 未定稿

⑥

風到寒梅落 風到りて 寒梅落ち
難分花与泥◎ 花と泥とを分かち難し
國風誰所傳 國風 誰か伝うる所ぞ
大雅無將迷◎ 大雅 迷わんと將る無し
唯當持獨靜 唯だ 當に獨靜を持して
不為歎孤淒◎ 孤淒を歎くを為さざるのみ
知己千年遠 知己は千年遠し
詩成笑示妻◎ 詩成り 笑いて妻に示す

◎上平八・齊

与謝野鉄幹と漢詩

未定稿の詩。定稿となった詩は分からないが、すでに引用した詩と併せ考えると、制作時は昭和九年二月か三月ごろと推定される。その事に就いては後で述べる。「寒梅」「妻」の詩語により季節は冬、「妻」は晶子である。五言律詩。

雪後用湖畔君来示韵 寛

⑦

雪後、湖畔君来りて示す韵を用う
 二月園中雪 二月 園中の雪
 今朝半作泥 今朝 半ば泥と作る
 梅花早芳烈 梅花 早に芳烈しく
 柳色既微迷 柳色 既に微かに迷う
 袞帳愛春暖 帳を愛^かげて 春暖を愛し
 擁爐忘晚淒 爐を擁^かして 晚淒を忘る
 未思出遊計 未だ出遊の計を思わず
 室有病餘妻 室に病余の妻有り

◎上平八・齊

渡邊湖畔の贈詩に対する次韻の答詩。「二月」「雪」「梅」「柳」「病余の妻」等の語により、早春の季節の詩である。「病余の妻」は晶子のこと。五言律詩。

この⑥・⑦の二首は、五言律詩で、韻は上平八・齊である。

ちなみにすでに引用した、③『冬柏』三・④『冬柏』四・⑤『次韻・和韻の詩なので、二・四・六・八句の末字がすべて「泥」「迷」「淒」「妻」の字である。したがってこれらの③・④・⑤・⑥・⑦の五首の詩は、制作時期が同じ時期に集中し、次韻の詩の相手は渡邊湖畔に限定され、詩題に「疊韵」「三疊韵」「四疊韵」の語があるので、両者の間の詩のやりとりがかなり頻繁であったと思われる。残念ながら、湖畔が鉄幹に宛てた詩は残っていないので推定の域を出ないが、鉄幹

の未定稿の紙箋からのこの解釈は恐らくまちがっていないだろう。また末句の脚韻の字「妻」が、③・④・⑤・⑥・⑦の五首の詩に共通しているのは、妻の晶子に対する夫としての愛情を示すものであり、ほほえましいとさえ言えるものがある。

遥青書屋雜詩傳湖畔詞兄一綵乞爲高和 寛

⑨

遥青書屋雜詩、湖畔詞兄に一綵を伝え併せて高和を乞う
 空豁西郊上 空豁 西郊の上り
 樓遲得小樓 樓遲 小樓を得
 遙峰雲際列 遙峰 雲際に列び
 一水草中流 一水 草中に流る
 對客猶青眼 客に對して猶お青眼のごときも
 親花獨白頭 花を觀るは独り白頭
 秋天聞斷雁 秋天 斷雁を聞き
 晚景見歸牛 晚景 歸牛を見る
 平樂自然至 平樂 自然に至り
 浮名何所求 浮名 何の求むる所
 細君亦知字 細君も亦た字を知り
 和我醉中謳 我に和して醉中に謳う

◎下平十一・尤

この⑨の詩は、制作時を確定できないが、遙青書屋で、秋の夕暮れ、妻晶子と短歌・漢詩を唱和した、のどかな風景を詠んだ詩である。珍しく詩の形式は五言十二句の排律詩である。平仄に関しては、十一句の下三字「亦知字」が仄字の連続である以外は正確であるが、対句の構成が平仄の規則に拘泥しすぎの感があり詩的表現が十分でないところがある。五言排律、十二句。

書懷次湖畔君芳韵

寛

⑪

懐いを書し、湖畔君の芳韵に次す

不知世過熱 知らず 世の過熱を

野屋洞然開◎ 野屋 洞然として開き

白露三竿竹 白露 三竿の竹

黄蟬一樹槐◎ 黄蟬 一樹の槐

涼風吹卷入 涼風 卷を吹きて入り

好友寄詩来◎ 好友 詩を寄せ来たる

未遂平生學 未だ平生の學を遂げず

爲之猶獨哀◎ 之が為に猶お独り哀しむ

◎上平十・灰

渡邊湖畔からの贈詩に対する次韻の答詩。この⑩の詩も制作時期を確定できないが、昭和九年の夏ごろの作ではないか。第一句の「過熱」は見慣れない詩語だが、文字どおり「熱すぎ」の意とすれば、和臭漢語である。猛暑の日中、学問の捗らないのを哀しむ心境を詠んだものか。五言律詩。

○

『冬柏』時代の鉄幹の漢詩は、『冬柏』十九首、『書簡集成』所収十一首、『渡邊湖畔氏蔵』十一首、で四十一首を数える。今回は、『冬柏』を基礎資料として、他の二つの資料と相互に重ならないものを選び、『書簡集成』から一首、『渡邊湖畔氏蔵』から四首、の計二十五首の詩をすべて挙げて、その特徴と問題点を提示した。

『冬柏』と他の資料との比較によって、鉄幹の並々ならぬ漢詩への傾倒と愛着を伺うことができたのは予想外の収穫であった。また『冬柏』掲載にいたるまで推敲に推敲を重ねて、定稿を作成したことが『渡邊湖畔氏蔵』の資料、言い換えれば生の資料によってある程度の考証また調査が可能であるように思う。初めて新潟県佐渡の渡邊資料館を訪れこれらの漢詩の資料を閲覧した折には、詩の題が一体何を意味するのか正直なところ皆目見当がつかず、ある程度の予測がつくま

与謝野鉄幹と漢詩

でにかなりの日数を要した。

最も重要な基礎資料としての価値を有する『冬柏』でさえも、まだ追跡調査を必要とする部分が多々残されている。創刊と終刊の年月日がやっと判明しただけでも少々進展したといえるが、やはり全体でどれだけの号数・冊数が発行されたのかはまだ明らかにされていない。複数の所蔵者の協力が早急に俟たれるところである。

今回は、『冬柏』を中心に、『書簡集成』、『渡邊湖畔蔵』等の資料を総合的に検討することによって、それぞれの資料の存在価値の再認識ができ、次へのステップとなりそうである。

関係者のかたがたに對して、深く謝意を表する次第である。

なお『滿蒙遊記』(『滿蒙遊草』)及び鉄幹自筆の漢詩の草稿、にっいては次の課題にしたいと考えている。

【※】本稿で取りあげた漢詩の所載雑誌の巻・号を改めて次に記しておく。

■『冬柏』十九首 湖畔宛：八首(底本は鞍馬寺蔵本を用いた)

①第五卷・第一号(昭和八年十二月二十八日発行)。

『冬柏山房抄』漢詩及書(色紙)。(昭和十年十月)

③第五卷・第三号(昭和九年二月二十八日発行)。

④第五卷・第四号(昭和九年三月二十八日発行)。

『湖畔氏蔵』⑤・③

⑤第五卷・第五号(昭和九年四月二十八日発行)。

『書簡集成』第四卷・43。『湖畔氏蔵』④。

⑥第五卷・第八号(昭和九年七月二十八日発行)

『書簡集成』第三卷・325

⑦第五卷・第八号(昭和九年七月二十八日発行)

『湖畔氏蔵』⑩

⑧第五卷・第八号(昭和九年七月二十八日発行)。

「湖畔氏蔵」⑫

⑨第五卷・第八号（昭和九年七月二十八日発行）

「湖畔氏蔵」⑧

⑩第五卷・第十号（昭和九年九月二十八日発行）

⑪第五卷・第十号（昭和九年九月二十八日発行）

⑫第五卷・第十号（昭和九年九月二十八日発行）

『書簡集成』第三卷・370、366。

⑬第五卷・第十二号（昭和九年十一月二十八日発行）

「湖畔氏蔵」①

⑭第五卷・第十二号（昭和九年十一月二十八日発行）

⑮第六卷・第一号（昭和九年十二月二十八日発行）

『書簡集成』第三卷・396。

⑯第六卷・第二号（昭和十年一月二十八日発行）

⑰第六卷・第三号（昭和十年二月二十八日発行）

⑱第六卷・第三号（昭和十年二月二十八日発行）

『書簡集成』第三卷・415。

⑲第六卷・第三号（昭和十年二月二十八日発行）

『書簡集成』第三卷・415。

※②小川茅村の詩。（注（2）参照）

■『書簡集成』全十六首 ◇二首（⑦・⑩） 湖畔宛：二首

① ●三疊韻呈湖畔兄 卷・番号 日付 冬柏・卷号

② ●歲端次森繁夫君兄示詩韻 2・378 大15・8・30

③ ●元旦次上田喜太郎君詩韻 2・454 昭4・1・18

④ ●々々 々々

⑤ ●中秋口占『塚』⑥ 2・484 昭4・9・21

⑥ ●寄懷于湖畔君（未定艸） 3・325 昭9・6・23 6・8

⑦ ●書懷廣和湖畔君瑤韻 3・366 昭9・9・5 5・10

⑧又

⑨ ●書懷 用湖畔君寄懷芳韻 3・370 昭9・9・15 5・8

⑩ ●偶成上田喜太郎君近： 3・394 昭9・11・24 5・10

⑪ ●次友人某君韻二首 3・396・375 昭9・11・27 6・1

⑫ ●々々 々々

⑬ ●二月五日雪後偶感 3・415 昭10・2・6 6・3

⑭ ●古沢君見示留別詩次韻： 々々

⑮ ●偶成 々々

⑯ ●（無題） 4・43 昭11・5・26 5・5

●湖畔宛書簡・葉書 ⑯西村一平宛書簡

■「渡邊湖畔氏蔵」全十四首 ◇四首 湖畔宛：十二首

① 昭和九年晚秋遊佐渡訪湖畔君先有五律一首次其韵以酬 寬

② 蒙古劉將軍嫩江水莊招宴席上遇黑龍江省督軍吳俊陞： 寬

③ 三疊韵記偶成 寬 未定稿

④ 偶成四疊韵 寬 未定稿

⑤ 偶成三疊韵 寬 未定稿

⑥ 疊韻偶感 寬 未定稿

⑦ 雪後用湖畔君來示韵 寬 未定稿

⑧ 次湖畔兄寄懷瑤韵以酬 寬 未定稿

⑨ 遥青書屋雜詩傳湖畔詞兄一粲併乞爲高和

⑩ 謝湖畔君 寬

⑪ 書懷次湖畔君芳韵 寬

⑫ 鷗外先生十三回忌辰謹賦 寬

⑬ 春日懷湖畔君二律 寬

⑭ 々々 寬

※①『冬柏』第五卷・第十二号

②『滿蒙遊草』⑳

③『冬柏』第五卷・第四号

④『冬柏』第五卷・第五號。『書簡集成』第四卷・43

⑤『冬柏』第五卷・第四號

⑥? ⑦?

⑧『冬柏』第五卷・第八號

⑨?

⑩『冬柏』第五卷・第八號

⑪?

⑫『冬柏』第五卷・第八號

⑬⑭昭和三年三月二日

〔◇〕本稿で取りあげた鉄幹の漢詩。〔冬柏〕は全十九首

〔参考文献〕

○『書簡集成』：『与謝野寛・晶子書簡集成』第一卷・第四卷 逸見久美編 八木書店。(二〇〇二年十月)二〇〇三年 七月

○『渡邊湖畔氏蔵』：渡邊湖畔は、新潟県佐渡の漢詩人、歌人、『明星』の同人。現在は「渡邊湖畔資料館」として、新潟県佐渡で、湖畔氏の甥に当たる渡邊和一郎氏がかつての湖畔所有の蔵書等を管理しておられる。筆者は、資料館を二度訪ねて、鉄幹自筆の色紙・紙箋等を直接、また直筆の書簡を閲読させていただいた。なお「渡邊湖畔氏蔵」に付した、①～⑭までの数字は「渡邊湖畔氏蔵」の十三点(十四首)に便宜上付した番号である。

〔注〕

(1) 西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩 初稿」本学・言語・文学・文化 第六号 平成十九年三月。

西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩―『海内詩媒』の漢詩人 安藤寛―」々 第七号 平成二十年三月。

西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩―『明星』第二次時代の漢詩人 与謝野 寛―」々 第八号 平成二十一年三月。

与謝野鉄幹と漢詩

等の諸稿で論じた。

(2) 時期的には、『冬柏』時代(昭和五年～昭和十年)よりも『満蒙遊記』(昭和三年の旧満州旅行)のほうが先であるが、鉄幹・晶子夫妻が主催した雑誌、特に鉄幹の漢詩に関して第二次『明星』に次ぐものとしては『冬柏』であると考え、先に取りあげることにした。

(3) 現在は全百八十八冊が確認されているが、第十六巻以降の冊数が未確認の状態である。(鞍馬寺蔵：百八十冊。西村一平氏蔵・田中和子氏蔵による補充八冊、発行総冊数は百九十一冊か。)内山英保氏は昭和十年十月に『冬柏山房抄』を刊行している。

(4) 内容は、絵画、書、短歌、漢詩などであり、執筆者は与謝野夫妻を始めとして『冬柏』の同人と重なるが、なかに堀口九萬一なども漢詩を寄せており、著名な作家、画家、歌人、俳人など実に豪華メンバーである。鉄幹は、漢詩、短歌、書を寄稿しているが、内山氏の依頼を受けて「冬柏山房の記」を書いている。昭和十年一月末の日付なので、内山氏も言うようにこれが鉄幹の散文の絶筆かも知れない。

(5) 『冬柏』第五巻・第三号(昭和九年二月二八日)
邀與謝野兩先生 小川茅村

与謝野兩先生を邀えて

高陵把臂挹餘芬 高陵 臂を把りて余芬を挹む

藝苑逸才推二君 芸苑の逸才 二君を推す

首首聯珠題詠在 首首 連珠 題詠在り

古城秋色四方聞 古城の秋色 四方に聞こゆ

※三頁所載の二、の鉄幹の漢詩は、この小川茅村の詩に対する次韻の答詩である。

(6) 「渡邊湖畔氏蔵」③

三疊韵記偶成

寛 未定稿

与謝野鉄幹と漢詩

三疊韻偶たま成るを記す

春寒花未笑 春寒くして 花未だ笑わず
何日燕啣泥 何れの日か 燕泥を啣え

名教人間盡 名教 人間尽き

謠言天下迷 謠言 天下迷う

時艱無逸樂 時艱 逸樂無く

戰歎有餘淒 戰歎んで 余淒有り

投筆歎衰老 筆を投じて 衰老を歎き

只憑兒与妻 只だ兒と妻に憑る

三頁所載の『冬柏』三、の詩には、「渡辺湖畔氏蔵」の⑤とこの③の未定稿の詩がある。

(7)

『書簡集成』第三卷366、に「書懷廣和湖畔君瑤韻」の「又」の詩として、次の詩を収める。

幽鶴在巖 幽鶴 巖に在りて 鷗は磯に在り

郊居猶守一書幃 郊居 猶お一書幃を守る

手栽三尺庭中樹 手ら栽う 三尺庭中の樹

驚見十年皆作囿 驚きて見る 十年 皆な囿を作すを

『冬柏』一一、の詩には、370とこの366の両詩がある。定稿となつた『冬柏』一一、の詩は師の古田字軒の校閲を得たものである。

(8)

『書簡集成』第三卷415（『冬柏』一六と詩題は同じ）に、次の詩が見える。

古沢君見示留別詩次韻以送其再赴任于満州

古沢君の示さるる留別の詩に次韻し以て其の再び満州に

赴任するを送る

明王立禮待佳賓 明王 立礼して 佳賓を待つ

正是舊邦維命新 正しく是れ旧邦 維だ命新たなり

良驥晚加千里氣 良驥 晩に千里の氣を加え

昂昂蹴破大荒塵 昂昂として 大荒塵を破る